

継続的な自己管理のために 多職種でCKD患者を支える

公益財団法人 ときわ会 常磐病院(福島県いわき市)

泌尿器科と腎臓内科を主に専門とする常磐病院では、地域の患者さんのニーズに応えられるよう、チーム医療を基盤とした全人的な医療の提供を行っている。腎臓内科では、管理栄養士による栄養指導に特に注力しており、管理栄養士の専門性を活かした「慢性腎臓病(chronic kidney disease:CKD)外来」では、臨床検査値に基づいた食事療法を展開している。今回、CKDにおけるチーム医療の実際について、栄養部の取り組みを中心にお話を伺った。

Hiroaki
Shimmura

常磐病院 院長

新村 浩明先生



Hiroshi
Kawaguchi

名誉院長

川口 洋先生

保存期のCKD患者に対する教育入院

常磐病院では患者さんご家族に、CKDに対する正しい知識を学んでもらうため、4泊5日の教育入院を行っている。教育入院では、専門職ごとにイラストを交えた資料を用い、疾患についての知識、適切な食事や生活習慣、介護や医療費に関する各種福祉サービスなどについて患者さんご家族に指導する。教育入院の際に用いた資料は1冊のバインダーにまとめ、退院後、患者さんが自宅に持ち帰って復習することができる仕様になっている(写真1)。

CKDは治療が長期にわたるため、患者さんの治療や生活習慣改善に対するモチベーションを維持することが重要となる。薬剤部長を務める薬剤師の早乙女浩之先生は「患者さんが継続的に服薬遵守できるよう、できるだけわかりやすい言葉を使い、パンフレットなどの資料を用いながら説明している。CKD患者は多剤併用の方が多いので、各治療薬の作用をきちんと理解し治療に参加して

多職種によるCKDのチーム医療

常磐病院では、医師、看護師、管理栄養士、薬剤師、メディカルソーシャルワーカーなどの様々な専門職から構成されるチームで、CKDから血液透析にわたる患者さんの管理と治療を行っている。最近では、「腎臓リハビリテーション」を目的に理学療法士や作業療法士などがチームに加わることもあり、個々の患者さんに合わせた、きめ細やかなサポートを行っている。

チームを統括する、名誉院長で人工透析センター長の川口洋先生は「当院におけるCKDのチーム医療は、一昨年から教育入院導入後から本格的に開始した。患者さんご家族が疾患や食事、生活習慣について正しい知識を持ち、その知識に基づいた生活を送れるようチームで協同して患者さんを支援している」と話す。



写真1 教育入院時の資料



写真2 たんぱく質含有食品の写真を用いた栄養部オリジナルカード

もらえるよう尽力している」と話す。また、看護師で内科外来看護主任の佐藤優子さんは「CKDは末期になるまで症状が現れない。そのため、患者さん自身が病気を理解し、納得して治療に臨んでいただけるよう心掛けている。CKD治療では患者さんの継続的な自己管理が鍵となる。治療面だけでなく精神面でも支えていくことが大切」と自己管理の重要性を強調する。

腎臓疾患の栄養指導に特化した管理栄養士がエビデンスに基づいた栄養指導を行う

常磐病院では、腎臓疾患に特化した栄養指導に力を入れている。腎臓内科では管理栄養士による「CKD外来」を開設しており、診察日前に食事記録と蓄尿を患者さんに提出してもらう。その結果を折れ線グラフ化し、たんぱく質や食塩の摂取量、クレアチニン・クリアランス、糸球体濾過量と食事記録に乖離がないか確認し、栄養指導を行っている。

栄養部係長で管理栄養士の日置清子さんは「CKDにおける食事療法の基本は、たんぱく質と食塩を制限し、指示エネルギーを十分に摂取すること。腎臓への負担を最小限に抑え、良質なたんぱく質を適量摂取できるよう、患者さんに指導している。また、食事療法は患者さん自身が実行するものなので、医療従事者だけでなく患者さん自身も治療者の一員である。患者さんが自分の病気を知り、食事制限の必要性を十分理解した上で、食事療法に臨むことが重要」と患者さんの治療に対する姿勢も大事だと述べる。

エネルギー制限と食塩制限に加え、たんぱく質を制限する低たんぱく食事療法を行っている患者さんでは、極端なたんぱく質制限により体重や筋肉量の減少がみられることがある。そのため、採血データや体成分分析装置(InBody)を用いた体成分測定の結果から、筋肉量や体脂肪量の経過観察を行い、エビデンスに基づいた個別の栄養指導を行っている。

また、低たんぱく食事療法は、一般食材のみではエネルギー量の十分な確保が困難なため、治療用特殊食品の利用も不可欠であ

る。治療用特殊食品を有効利用した献立を提案し、エネルギー不足にならないよう、栄養指導を行う。

低たんぱく食事療法を行っている患者さんから「指示エネルギーを十分に摂取するのが難しい」と相談を受けることが多いため、常磐病院では、たんぱく質含有食品の写真を用いたオリジナルのカードを作成し、摂取可能なたんぱく質量を可視化しながら説明している(写真2)。また、本カードは持ち帰り可能で、患者さんやご家族が自宅で食事を作る際に食材をカードの上に乗せてたんぱく質を計量できる仕組みになっている。「カードを見せながら摂取可能なたんぱく質量を説明すると、“低たんぱく食事療法でも肉や魚を意外に食べられる”と感じる患者さんが多く、指示エネルギーの適切な摂取に役立っている。患者さんと一緒に日々の食生活を少しでも豊かにし、苦しい食事療法を有意義なものにするために、患者さんに寄り添った栄養指導を行っていきたい」と日置さんは話す。

患者さんのライフスタイルに即した個別ケアが重要

近年、高齢化や独居のCKD患者への対応が多くなり、食事療法の遂行や服薬遵守が困難になるケースが問題視されている。就労、医療費や介護の問題など多岐にわたる支援を行うメディカルソーシャルワーカーの上妻潤子さんは「CKDを含めた患者さんの高齢化が深刻な問題となっている。生活障害が発生する前に、事前にできることを提案し、患者さんの療養生活における不安を少しでも除去することがソーシャルワーカーの役割」と話し、長期入院や介護が必要になった場合を見据え、早めに準備することの重要性を唱えた。

川口先生は「郡部で多職種によるCKDの教育入院を行っている施設はまだ少ない。当院では医療スタッフが積極的に協力してくれるため、臨機応変にチーム編成を変え、各職種の専門性を活かした個別指導を行うことが可能となっている。患者さんの生活スタイルや病状に合わせた丁寧なケアを地域の患者さんに提供していきたい」と、患者さんの背景を考慮した、最善の治療環境の提供について、今後の展望を述べた。



常磐病院